共創ネットワーク

学林舎情報

●発行日:2019年5月18日(土)

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp



CAKURINGHA OPICSHA

2019年教育の行き先 2019年度 全国学力テストに関して

2019年度の全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)が、2019年4月18日に小学6年生と中学3年生を対象に全国で一斉に行われ、国立・公立・私立の小中学校合わせて2万9518校の児童・生徒およそ212万1000人が受験しました。

2019 年度より中学 3 年生に英語が初めて導入され、小学校 2 教科(国語・算数)、中学校 3 教科(国語・数学・英語)で実施されました。また、2018 年度実施までは、国語と算数・数学は、おもに基礎知識を問うA問題と、応用力をみるB問題に分けて出題されましたが、2019年度からは、基礎知識と応用力をみる問題を合わせて出題する新形式に変更されました。初めて導入された英語については、「読む・聞く・書く・話す」の 4 技能の試験が実施されました。

教科ごとに、どのような単元の出題があったかを解 説します。

【国語】

○小学国語について

公衆電話について報告する文章を題材とし、目的や 意図に応じて図やグラフを用いて、自分の考えが伝わ るように工夫して書くことができるかをみる問題や、 ノートや本から一部分を抜粋したものを題材とし、文 章の内容を的確に押さえて、自分の考えを明確にしな がら読むことができるかどうかをみる問題が出題され ました。また、広報誌の記事やインタビューの様子を題 材とし、必要な情報を得るために話し手の意図を捉え ながら聞いたり自分の考えをまとめたりすることができるかどうかをみる問題も出題されました。

○中学国語について

新聞記事を題材とし、文章から必要な情報を読み 取って整理して考えたり、根拠を明確にして自分の考 えをもったりすることができるかどうかをみる問題 や、会話文から、話し合いにおける発言の役割や進行す るうえでの工夫を読み取れるかどうかをみる問題など が出題されました。また、意見文を題材とし、伝えたい 事柄について根拠を明確にして書くことができるかど うかをみる問題、語の一部を省いた表現について、話や 文章の中での適切な活用のしかたが理解できているか どうかをみる問題も出題されました。

【算数・数学】

○小学算数について

台形を題材とし、図形について筋道を立てて考察し、表現することができるかどうかをみる問題や、棒グラフから資料の特徴や傾向を読み取る問題、計算のしかたを理解したうえで、ほかの数値の場合に適用して計算したり、計算のしかたを記述したりできるかをみる問題が出題されました。また、遊園地での待ち時間を題材とし、伴って変わる2つの数量を見出すことができるかどうかをみる問題も出題されました。

○中学数学について

小学算数とは少し異なった形で、従来のA問題のような基礎知識を問う問題とB問題のような応用力をみる問題が合わせて出題されました。正の数・負の数、連立方程式、平面図形、比例・反比例、確率の内容はA問題形式で出題され、その単元の知識事項を問う問題や、計算技能が身についているかを問う問題が出題されました。応用力をみるB問題形式では、関数のグラフやヒストグラム、表などの資料から、事象を数学的に解釈

● 共創ネットワーク学林舎情報



し、問題解決の方法や判断の理由を説明することができるかをみる問題や、図形の証明問題や連続する奇数の和を説明する問題から、筋道を立てて考えたり、総合的・発展的に考察して新たに見出した事象を説明したりする問題が出題されました。

【英語】

初めて導入された英語では、「読むこと、聞くこと、書くこと」に関する問題と、「話すこと」に関する問題が出題されました。

「読むこと、聞くこと、書くこと」に関する問題は、放送を聞いて情報の詳細を理解したり、話の概要を理解したりすることができるかどうかをみる問題や、文章を読んで情報の詳細を理解したり、書かれた内容に対して自分の考えを記述したりする問題などが出題されました。

「話すこと」に関する問題は、英語の基本的な音声の特徴を理解できているか、身近な英語の質問に正しく応答することができるかをみる問題が出題されました。「話すこと」の試験は5分程度で、生徒の解答をパソコンに録音する形式で実施されました。しかし、パソコンの整備が不十分な学校もあり、全員参加でなくなるため、「話すこと」の結果は参考値として公表することになりました。

(文/学林舎編集部)

2019年学習の行き先 成長する思考力GTシリーズ国語 からはじまる表現力学習

『成長する思考力GTシリーズ国語』を用いた読解力育成の取り組みが行われています。GT国語の特長のひとつは、与えられた設問の範囲で正確に答えられる能力を身につけられることです。

読解力育成の先には、学習者の日本語表現力を豊かにする目的があります。表現力を豊かにするには、G T国語を用いた学習はもちろんのこと、様々なプラス アルファが必要です。それは、読書をしたり、その内 容を要約したり、感想文や作文を書いたりすることで す。しかし、学習意欲が低下している子どもに強制的 に取り組ませても、効果はありません。まずは、子ど もたちが自発的に学ぶ姿勢を身につけ、社会で生かせ る力を育むための学習が必要になります。

学林舎では「聞くこと」「読むこと」「話すこと」をテーマに、過去に様々な形式の学習方法を提案してきましたが、今回は「聞くこと」について再提案したいと思います。

○聞くこと

言語表現において、話を聞くことから全ては始まるといっても過言ではありません。ここでいう「話を聞くこと」とは、ひとつのテーマを巡って、話し手が何を自分に伝えようとしているのかを理解することです。

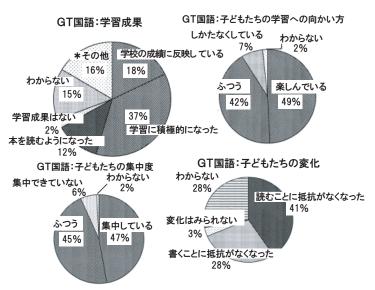
しかし、成長するにしたがって、子どもたちは自分の経験と照らしあわせて判断する独自の基準をもつようになることで、他人の話を退屈だと思うこともあります。大人の場合はさらに経験が積み重なっていきますので、自然と聞き流している状況も多くなります。この「自分はわかっている」という姿勢を改善しない限り、言語表現力の向上にはつながってきません。改善するためには、いくつか手段があります。ひとつはメモを取ること。内容はどうであれ、話を聞いて、メモをとることによって、聞いた内容に意味があるのか、ないのかを判断できます。小学校低学年の内にメ

典別ネットワーク学林舎情報(



モをとること、メモを見直す習慣を身につけることに よって、子どもの言語表現力の"のびしろ"は大きく 変わります。

一文、二文を読み聞かせる方法もありますし、ラジオを聞く、テレビを見ることも方法のひとつです。まずは、子どもが興味関心のある素材を選択し、"聞くこと" "メモを取ること" を習慣づけてください。



グラフ/GT国語学習者100人対象

*学習成果のその他には、次のような回答をいただいています。

- ・何度も読んで考えるようになった。
- ・要約力がついてきたと思う。
- ・文字ではなく文章として読めるようになった。
- ・問題文と設問の関係がわかってきた。
- 漢字が好きになった。
- ・楽しんでいるという点で効果があった。
- ・段階的に理解ができはじめた。
- ・知識を理解し、吸収する力が向上したように思う。
- ・文章を論理的に読む視点ができはじめた。
- ・会話の際の語彙力の向上を感じる。
- コミュニケーションが上手くできるようになった。

(文/学林舎編集部)

2019年学習塾の行き先 教えるのではなく指導する 覚えさせるから考えさせる

この10年で、学習塾の指導形態の80%以上が個別指導を取り入れるようになりました。その多くが1対1のマンツーマン形式によるもので、手取り足取り子どもたちに指導をしているのが現状ではないでしょうか。

指導形態が、この10年でなぜこの形式になったのでしょうか? 理由の一つに生徒や保護者のニーズがあります。「自分だけを見てほしい」「自分の子どもだけを見てほしい」という願望です。

この願望に対して積極的に応えたのが家庭教師のシステムといえます。しかし、本来、指導方法が違うはずの学習塾が、家庭教師のシステムを取り込んだことによって"学習塾の良さ"という最も大切な部分をなくしたように、私は思います。

今から30年以上も前になりますが、私が高校生の時 に通っていたような学習塾の多くは、どちらかという と学習塾というより"私塾"というイメージが強かっ たように思います。そして"教えてもらう"というよ り "指導してもらうために自分が勉強する"といった 学習形式でした。そして何よりも、先生と生徒に良い "距離感"あったように思います。現在の先生から、 この"距離感"がわからないというお話をよく聞きま す。保護者の世代が変わったから、社会の状況が変 わったからという理由もあるでしょう。そのために昔 とは違った対応が求められるのかもしれません。しか し、昔のような良い距離感は"ニーズ100%" "手取 り足取り""1から100まで教える"という今の学習 塾とは異なっていたからこそあったもののように思い ます。それが、学習塾で学ぶ者にとっては良かった と、私は思います。つまり、"考えさせてくれる時 間"が昔の学習塾にはあったと思います。

では、これからの学習塾にどのような学習指導が求められるのでしょうか。

...........

◇求められる2つの力

〇自覚しながら学習をする"力"を目指す

最近、多くの先生に「どうしたら、子どもたちは学習意欲がでるのでしょうか」と聞かれます。ひとつには、目的・目標の明確化があります。たとえば、"受験"は良いか悪いかは別にして子どもたちのやる気を向上させます。しかし、この目的・目標は、知識を詰め込み、習得した知識を生かせないまま忘れていくという多いです。簡単な言葉でいえば"丸暗記、丸忘れ"です。

知識の習得にあたり「なぜこの知識が必要なのか」を子ども自身が自覚しなければ、本当の意味で身につけることができません。自覚させるには、文章化させることもひとつの方法ですし、対話をすることも有効です。学習者にとって「塾に来る意味、価値」をつくりださなければならないのです。

〇覚えるから考える"力"を目指す

結果より過程が、今求められています。もちろん結果も大切ですが、学習者にとっては結果は一瞬のことにしかすぎません。それまでの過程が学習者に問われているのです。この過程を充実させるには"覚える"という学習指導が中心ではできません。"考えさせる"という学習指導が求められています。

英語であれば"名詞について文章化させる"、数学であれば"正負の数とは、実生活、社会でどのように用いられるのかを調べて、発表させる"、社会であれば"日本国憲法と他の国の憲法を比較させ文章化させる"など、子どものレベルにあわせて、1回の指導の中で何かひとつでも考えさせることが、過程を充実さえることにつながるのです。(文/北岡)

● 共創ネットワーク 学林舎情報



TOSS TOAC 第93回 文/吉田良治

進化したサニブラウンから 見えたこと

現在アメリカのフロリダ大学に留学中の陸上短距離選手のサニブラウンは、今月 SEC チャンピオンシップ (南東リーグ選手権) に出場し、日本人 2 人目の男子100m10 秒の壁を破る 9 秒 99 で優勝しました。来月はNCAA (全米大学体育協会) 大学陸上選手権や日本陸上競技選手権、そして 7 月は全米陸上選手権などの出場が予定され、また 9 月には世界陸上競技選手権も開催されますので、さらなる記録更新の期待も高まります。

近年アメリカの大学を目指す日本人アスリートが増えています。バスケットボールではジョージワシントン大学に進学し、現在 NBA メンフィス・グリズリーズで活躍中の渡辺雄太、ゴンザガ大学で活躍し、今年のNBA ドラフトの目玉の八村塁をはじめ、多くの日本人がアメリカの大学でバスケットボールをしています。サッカーでもメリーランド大学で活躍し、現在北米プロサッカーリーグのMLS トロント FC で活躍している遠藤翼をはじめ、アメリカの大学でサッカーをしている日本人選手が増えています。

これらの日本人選手が所属するアメリカの大学スポーツ、NCAA は学業優先の大原則があり、秋、冬、春の3つのシーズンでスポーツ活動が行われます。学業成績は GPA (学業評価指数) 2.0 (100 点満点で70 点に相当)以上が求められ、これを下回ると試合や練習などの活動が停止になります。またスポーツシーズン制により、年中一つのスポーツをし続けることができず、春スポーツの陸上競技は秋・冬シーズンに活動することはできません。秋スポーツのサッカー、冬スポーツのバスケットボールも同様です。年間の半分近くはオフシーズンですので、試合をすることはありませんし、練習もウェイトレーニングなどのコンディショニングに限定

されます。年中ほぼ制限なくスポーツ活動ができる日本からすると、日本人がアメリカの大学で競技力を高めるのは難しいと考えがちですが、前記に上げた日本人選手のように、学業を優先し、練習や試合の制限を設けながら、トップレベルの成績を挙げている実績を見ると、そろそろ"〇〇一筋思考"を変える時代に入ったといえます。

サニブラウンの通うフロリダ大学はイギリス・タイムズ誌の世界大学ランキング 156 位、渡辺雄太が卒業したジョージワシントンは 181 位、遠藤翼の卒業したメリーランド大学は82位で、日本では東京大学(42位)と京都大学(65位)しか入っていない世界200位以内の大学です。このレベルで文武両道を実践し、それぞれで高いレベルの成績を収めることは、新しい令和の時代に必要な総合的な人間力を育んでいきます。

アメリカの大学スポーツ NCAA をモデルに今年3月、日本の大学スポーツ改革・大学スポーツ協会・UNIVAS が設立されました。この国の政策は年間1,000億円の収入があるNCAA をモデルに、日本の大学スポーツを産業化することが目的で始まりました。しかし、良識ある大学スポーツに関わる関係者から、これまで日本のスポーツ界で蔓延してきた体罰などの問題、そして学業を疎かにするスポーツ偏重の文化を改善することは、大学スポーツの産業化以上に重要!との声を受け、現在様々な課題の改善を目的に活動をしています。私もUNIVAS設立準備委員会で学業充実・学習機会確保部会に参加し、学生アスリートが健全に学生スポーツの活動ができる環境整備に関わりました。

有望な若手アスリートの海外流出は、今後も続いていくことが予測されます。特にオリンピックや世界的なプロスポーツの舞台で活躍する日本人アスリートの登竜門がNCAAとなれば、スポーツ庁の鈴木大地長官が危惧する"大学スポーツの魅力を出していかないと、日本の大学を素通りすることがますます起こりうる"は、さらに加速していくことになります。(つづく)

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランプライト元ワシントン大学へッパコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog http://ameblo.jp/outside-the-box/
